

森本哲郎

あし へ の 旅

変わりゆく人間
変わりゆく社会

森本哲郎

あじただへの旅

変わりゆく人間 変わりゆく社会

ダイヤモンド社

著者略歴

もりもと てつ ろう
森 本 哲 郎

1925年東京に生まれる。東京大学文学部哲学科、同大学院社会学科を卒業。朝日新聞東京本社芸部次長、『週刊朝日』副編集長を経て、現在、朝日新聞編集委員。著書：『文明の旅』（新潮社）、『人間へのはるかな旅』（潮出版社）、『サハラ幻想行』（河出書房新社）、『詩人と謝蕪村の世界』（至文堂）、『イースター島——遺跡との対話』（平凡社）、『生きがいへの旅』『ゆたかさへの旅』『ぼくの旅の手帖』『ことばへの旅』＜第1集・第2集・第3集＞『異郷からの手紙』（以上ダイヤモンド社）など多数。

現住所：東京都杉並区永福 2-46-3

あしたへの旅——変わりゆく人間、変わりゆく社会

昭和 50 年 9 月 4 日 初版発行

著 者 森 本 哲 郎

© 1975 Tetsuro Morimoto

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集電話 東京 (504) 6403
販売電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 25976

¥ 980

編集担当／花田茂明

加藤文明社印刷・高陽堂製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

1330-187880-4405

目

次

序章 トレドの丘にて

第一部 生きがいの条件

9

1 余暇は精神の遊園地

11

2 逃げて行ったあの無為の夕べ

22

3 パンに食べられたシューベルト

37

4 楽しみはどこに？

51

第二部 日本人の発見

67

1 わが内なる漱石

69

2 日本の『宮本武蔵』たち

85

3 物の価値・心の価値

99

4 断絶の三世代

108

第三部 人間の極限

1	モーツアルトとヒットラー	117
2	ヒットラーとヴィトゲンシュタイン	130
3	わが友三島由紀夫	193
4	日本のドン・キホーテとサンチョ・パンサ	214

第四部 文明の原点

1	世界七不思議紀行	233
2	砂と文明と神	256
3	インダスとガンジスのあいだ	274
4	ふたたびカサブランカにて	288

あとがき

あしたへの旅

—— 変わりゆく人間、
変わりゆく社会

アルカンタラ橋を渡って私はトレドの丘をのぼって行った。のぼって行くにつれてトレドの灰色の町は、すこしずつタホ河の向こうで沈んで行った。

私はエル・グレコの「トレド風景」にいちばん近いながめを求めて、うしろから列をなしてくる観光バスをよけながら、アスファルトの道をひとりテクテク歩いた。道のすぐ下に丘の斜面が、かなり急な角度でタホ川へ落ちこんでいる。その斜面のどこでもよかった。ちょっとおりて行くとユーカリの繁みがあり、こころよい日蔭をつくっている。私はそこにすわり真下のタホ川を見おろし、対岸のそびえるアルカサル（城）をながめた。

九月。トレドは深い真昼のなかにあった。

いつ来てもトレドのながめはすばらしい。こんな町がこの地上にあるとは考えられないほどだ。よくみるとグレコの描いた「トレド風景」とはかなりちがっているのだが、それがすこしもちがっているように思えないところにトレドの秘密があり、グレコの秘密があるのだろう。グレコのタブローのなかでは、トレドの丘はもっと起伏がはげしく、アルカサルやカテドラルはもっと白い。家並もまばらで大半が緑におおわれている。だが、いま私の眼前にひろがるトレドは、なだらかな丘をびっしり

と灰色の建物が埋め、まるで巨大な蜂の巣のような感じである。けれど、それが奇妙なことに、グレコの絵をそっくり置きかえたように思えるのだ。ということは、町の表面はいくら変わっても、町の本質はすこしも変わっていない、ということなのであろう。

トレドの町は、その町が憩っている丘と同じだけ古い、と案内書にあった。たしかにこの町は古い。知られるかぎりでも、この丘にまずフェニキア人がやってきたし、カルタゴ人もきた。やがてギリシアの商人が訪れ、さらにローマ人、ゴート人、そして六世紀からはモーロ人が三世紀にわたって支配する。私がいま見おろしているアルカンタラ橋——いや、アルカンタラというのはアラビア語で「橋」の意味だから、ただアルカンタラと呼ぶべきであらう——は、あきらかにもモーロふうである。やがて十一世紀にキリスト教徒の巻き返しレコンキスタが起り、モーロ人を追い払ってスペイン王国の拠点とする。以後十六世紀までこの町はスペインの首都として栄えるのである。クレタ島出身のグレコがここに住んだのは、十六世紀末から十七世紀にかけてだった。

それにしても、なんという深い真昼であらうか。いつか頭上の道を通る車の往来も絶えて、あたりは森閑としてしまった。タホ河の水音がかすかにきこえてくるような気がする。

スペインの町々は、午後二時ごろから五時ごろまで眠りこけてしまう。昼食と昼寝の時間である。ことに小さな町だと、その沈黙はいっそう深い。店は閉められ、路上には人影がほとんどなくなる。広場では噴水がひとり跳っているだけである。スペインはそのとき、文字通り光と影の王国になる。

私はこの時間のスペインがこの上なく好きだ。なんという心地よい生活のリズムであらうか。その真空のひとときがやがて夕べに傾いてゆくころ、スペインの町々はふたたび動きだす。そして六時ごろになると、こんどはどの町々にも散歩の市民たちでたいへんな賑わいを見せる。彼らはこの生活の

リズムを、どんなことがあろうと崩さないのだ。

いま、トレドはその日盛り、昼寝の時間である。おそらく、狭い曲りくねったトレドの古びた灰色の通りには人影が絶えてしまっていることであろう。いたるところに見られるトレド細工の店も閉まっているはずだ。ただレストランだけが旅行者で賑わっていることであろう。

私も丘の斜面に寝て目を閉じる。目を閉じても瞼の上でユーカリの葉がそよぐさまがよくわかる。トレドもいまは光と影の王国となり、ただ光と影だけがたわむれている。そのなかで、私はドン・キホーテを論じたオルテガの一文を思い出す。オルテガは、とある春の午後、やはりこのような木立の下に憩って、さまざまな想いに耽るのである。その場所は、マドリードからトレドとは反対に西北へ約五十キロ、グアダラーマの南麓にある静かなエル・エスコリアル僧院のほとりだった。修道院は丘の上にある。その丘の斜面の樫の林をオルテガはこよなく愛し、そこで思索に耽った。彼の『ドン・キホーテをめぐる省察』はそこで生まれたといってもよい。「はかない春のある午後、さまざまな思索が私を訪れた」と、彼はその冒頭に書いている。

私は同じように、いま、トレドの丘の斜面、ユーカリの木立の下にいる。自分にも、はたして思索が訪れてくれるであろうか。思索とは、オルテガのいうように、まさしく訪れるものなのである。そして、思索にとって必要なのは——とうぜんのことであるが——何といっても、このような静かなひととき、そして、このような沈黙の空間である。

だが、日本の町々にはそのような時、そのような場所がほとんどなくなってしまった。日本の町はあまりにも騒がしすぎる。そして、あまりにも忙しすぎる。思索が訪れようにも、これでは途中で引き返さざるをえないではないか。

なぜなのだろう。日本人はかつて静かさを何より大切にし、のどかな午後を心ゆくばかり愉しんだ

のではなかったか。それがいつの間にかくもせわしくなく、かくも騒々しくなってしまうたのであろう。日本人の一日の生活にどんな深いひとときがあるというのか。日本人は、いったい何のために人生を騒音で満たし、一日を小刻みにすりつぶしているのだろう。

それが「現代」なのか。もしそうだとしたら、現代とは人間の歴史のなかで最も貧しい時代の代名詞にほかならないではないか。

それが「進歩」ということなのか。もしそうだとしたら、進歩とは人間にとって最もみじめな道行きにほかならないではないか。

私は目をあけて、ふたたびタホ河越しにトレドのこの世のものとも思えぬ風景に見入る。この世のものとも思えぬ、とは、現代という時代とはとうてい思えぬ、ということである。トレドはむかしとすこしも変わっていないように思われる。それを現代の言葉に訳せば、時代からとり残された、おくれた、眠りこけたような、進歩せぬ、怠惰な、そしてダメな町ということになるのかもしれない。しかし、待て。

オルテガはエル・エスコリアル僧院の丘で、彼をとりかこむ「森」について思索をはじめた。

——森は可能性である。われわれが入ってゆこうと思えばどこまでも奥に入りこむことのできる一筋の小道といってもいい。そして、森は静かさの腕に泉を、私たちが歩いてゆけば必ず見つけることのできる泉を抱きかかえている……。

オルテガがここでいう「森」とは、人間世界のシンボルと解すべきであらう。だからその「森」を

人間の「町」に置きかえてもいいし、もっと広く解して人間の「社会」そのものと考えてもよからう。あるいは、人間の形而上的な世界、すなわち「観念」や「イメージ」の森と解してもかまわない。人生とは、このような森の小道をたどることなのであり、森に抱かれた泉への旅なのである。

日本にはそうした「森」がないのだ。現代という時代は、そのような森を片っ端から伐り倒して泉を涸らしてしまふ時代のことなのである。森は消え、泉は涸れる。だが、人びとはそれを進歩だと考え、発展だと思っている。なんとという錯覚だろう。

いや、しかし、人びとはようやくその錯覚に気がつきはじめたようである。日本といわず、世界じゅうがそれに気づき、自分たちの生活を、環境を、社会を、あらためて見直し、どうしたら人間がもっと幸福に暮せるのか、どうしたら人生がもっと充実したものになるのか、真剣に考えはじめた。人間は、あしたに向かってすこしずつ変わろうとしている。これは、人間史のなかでも、文字通り画期的な変化といってよからう。

では、人びとはどのような「あした」を期しているのでしょうか。

対岸のトレドの丘は、またすこし色を変えた。一日がゆっくりと夕暮へ移ってゆく。それをながめつつ、私は、ふと思う。

この風景は、「あしたへの旅」について、何かを語りかけているような気がする。何をささやいてるのであろう。

先年、九十九歳で世を去ったスペインの歴史家ラモン・メネンデス・ピダルはスペイン史の序論でスペイン民族の特質をこう記している。

「スペイン民族の中には、もっとも深い意味で自然の原動力が、その活力を無傷に保っている。

それは文明の享樂や享受によって毒を盛られた他の諸民族を脅かしている退化衰退、その絶えざる危険に対する一種完全な人間的抑制として働いているのである」『スペイン精神史序説』佐々木孝訳

トレド風景がいま語りかけているのは、まさしくそれではないのか、と私は思う。むろん、この丘にもいろいろな出来事はあった。いや、この丘は世界の中でも最も激しい人間の争いのドラマが演じられた場所だといってもいいほどだ。最近ではあのスペイン市民戦争の悲劇の舞台でもあった。スペインの歴史自体がそうだった。そして、現在でもこの国には無数の問題、無数の課題が渦巻いている。にもかかわらず、ビダルというスペインの特質は失われてはいないような気がする。げんに彼らは一日一日の午後をこんなにも深く呼吸しているではないか。

スペインは日本や他のヨーロッパ諸国にくらべて、貧しい。しかし、それはビダルがいうように、「経済的な利益よりも理想追求の動機に熱意を示す」からなのであり、「物質的な安樂が、尊大かつ誉れ高き精神の理想への欲求を、けつしてしのぐものではなかった」からなのである。だからといって、私はスペインが「あした」を暗示する、というつもりはない。スペイン人がそのような活力の持ち主であるかいかも断言するわけにはいかない。けれど、それがスペイン人のものであるとなかろうと、「あしたへの旅」に必要なのはそうした活力ではないか、と思うのだ。

タホ河を越えて、その活力がかすかにつたわってくる。トレドはシエスタからさめ、夕べの活動を始めたのである。やがて広場に、道々に、散歩の市民たちがあふれることであろう。

私は立ちあがる。いつかタホ河を夕陽が金色に染めている。トレドはあしたも晴れるのであろう。私たちのあしたは？

私はここから「あしたへの旅」へ出発する。「あした」を考える旅へ。

第一部

生きがいの条件

デリーの北二〇〇キロほどのガンジスの岸に、リシケッシという町がある。小さな町だが、すぐ近くにくつかのアシュラムがあつて、ここがインドの北部の聖地になっている。

アシュラムというのは僧院である。いや、僧院というより道場というほうが当たつていよう。その意志さえあれば、だれでも入ることができ、ここでヨーガの修行をやつたり、瞑想したりという日々を送ることができるのである。私はそうした修行道場のひとつ、シバナンダ・アシュラムに一週間ほど寝起きしていた。

修行者のなかには、ヨーロッパ人が多かった。ドイツ人、フランス人、スイス人などであるが、若者よりむしろ中年や老年の男女が目についた。なかには、もう一年以上もここで暮しているという人も少なくなかった。

そのアシュラムとリシケッシの町のあいだに、「スイス小屋」と呼ばれるバンガローふうの宿舎があつた。聖地リシケッシにやってきて、この風物と霊的な生活にすっかり傾倒したひとりのスイス